

一八八二年十一月十五日(水)

サーカス劇場にて

——家庭を持った人、及び他の様々な職業人の困難な問題と聖ラーマクリシュナ

聖ラーマクリシュナは、シャームプクルのヴィディヤサーガルの経営する学校の門口に馬車でお着きになった。時間は午後三時になるところ。馬車に校長をお乗せになった。ラカールとほか、一、二名の信者が馬車に乗っている。今日はキリスト暦一八八二年十一月十五日、水曜日。カルティク月三十日、黒分五日目。馬車はチップル街の近くを通って、マイダーン広場に向かって進んだ。

聖ラーマクリシュナは大喜びで——もう夢中になってしまわれて、馬車のこちら側に出されたり、あちら側に顔を出されたりして、子供のようにあたりを眺めておられる。そして通行人を話の種にしては、信者たちとあれこれ話っておられる。校長に向かっておっしゃった。

「ご覧、どの人も低いところに目を向けている。胃袋のために駆けずり廻って、神様の方には目もくれない！」

聖ラーマクリシュナは、今日はマイダーン広場にあるウィルソン・サーカスを見物に来られたのである。広場に到着して、劇場の切符を買った。ハアナの、つまり一番安い切符である。信者たちは高い

場所にお連れしてベンチに坐らせた。タクールは大喜びでおっしゃった。

「ウアー、ここからはよく見えるよ！」

サーカスではいろいろな曲芸を演じた。見物人は長い時間、飽きもせず見ていた。円形のトラックを馬が走っている。馬の背には、片足で西洋人の女が立っている。トラックの上方には間隔を置いて大きな鉄の輪がしつらえてある。その輪のところをいくと、馬は輪の下を駆け抜け、女は馬の背から跳び上がって輪の中をくぐり、再び馬の背に片足立ちで立つのだ！ 馬は何度も何度もそのトラックをパカパカと駆け続け、西洋の女もまた、繰り返し、繰り返し、輪をくぐり抜けて片足で立っている！

サーカスは終わった。タクールは信者たちといっしょに高いところから降りてきて、広場の馬車のところへ来られた。寒くなってきた。タクールはお体に緑色の幅広い布をまとって、空き地に立って何かとお話をしておられる。そばには信者たちが立っている。一人の信者は、手に香辛料スパイスの入った小さい容器を持っていた。その中には、特別にカバブチニ(クベバ・ジャワ)のような一種(一種)が入っていた。

(訳註——当時のベンガル人はそういう容器をいつも持ち歩いてタバコ代わりに口に入れていた)

〔先ず霊の修行、それから社会生活——訓練トレーニングのヨーガ〕

聖ラーマクリシュナは校長に向かってこう言われた。

「見たかい、西洋の女が片足で馬の背に立っていて、馬はパカパカと走っている！ あんなに難しい芸当を、長い間かかって練習して出来るようになったんだよ！ ちょっと気を外そらしたら最後、手や

足を折つたり、死ぬことだつてあるんだ。この世で暮らすのもあれと同じように大変なことだ。たくさん修行やお祈りをして、神様のお恵みをいただいて通り抜けている人もある。大方の人はだめだ。世間のなかに入ると、あれよ、あれよ、という間にいろんなことに巻きこまれたり、溺れたり、死ぬ苦しみを受ける！ わずかの人がジャナカ王たちのように、たくさん修行をした後で社会生活をする。だから、霊の修行や祈りが、どうしても必要だ。それでなけりや、この世で正しく生きては行けない」

〔バララームの家における聖ラーマクリシュナ〕

聖ラーマクリシュナは馬車にお乗りになつた。馬車はバグバザール地区のボスバラ街のバララームの家の門口に着き、タクールは信者と共に二階の応接間パに通つて坐られた。夕方なのでランプに灯がともされていた。タクールはさかんにサーカスの話をなさる。信者たちが次々と大ぜい集まつてきたので、やがてかれらといっしょに神についてのお話が始まつた。もう他の話は一切されず、ただ神の話ばかりである。

〔聖ラーマクリシュナ、カースト制度と不可触民問題アブクタッチャプルを解く〕

カーストの差別に関する話になつた。タクールはおっしゃつた。

「一つの方法でカーストの差別はなくなる。その方法は——神への信仰だ。神の信者にはカーストの差別はない。真の信仰があれば、体も心も魂もみな清浄になる。ガウルとニタイ(チャイタニヤとニティ

ヤーナンタは、ハリ(神)の御名を唱えることを教えて賤民を胸に抱きしめた。信仰がなければ、バラモンもバラモンの値打ちがない。信仰があれば、賤民も賤民でなくなる。不可触民も信仰を持てば、清浄で神聖なものになる」

〔俗世間に縛られている魂について〕

聖ラーマクリシュナは、俗世に縛られた魂の話をなさる。

「かれらはカイクのようなものだ。その気になりさえすれば外に出られるのに、大変な苦勞をして一生懸命マユを作ったものだから、それを破って出ることが出来ない。それで、その中で死んでしまう。また、渦の中に巻き込まれた魚のようでもある。入ってきた道を通れば出られるのに、水の甘ったるいざわめきに気を惹かれて、ほかの魚どもと夢中になって遊んでいて、外に出ようという努力もしない。息子や娘のあどけないおしゃべりは水のさざめく甘い音。ほかの魚は——つまり、親兄弟や友だち。そんなわけだから、ほんの一人、二人が走って逃げだすのだが、そういう人を自由になつた魂ジレフというんだよ」

タクールは歌をおうたいになる。

マハーマイヤ  
造化まぼろしの力の幻影まぼろしに

我われから虜とりこになり果なつて

この世に迷う人びとは

ブラマーとヴィシユヌはわからない

おもりを下げた網あみの中

魚は群はれて入りきて

出入みちの路はここにある

けれども魚は何故逃げぬ

タクールは又、こうも言われる。

「生き物たちは穀物の粒のようなものだ。石臼いしうすの中に入れられている——碎かれてしまうのだ。幾粒かは芯棒の近くにあつて碎かれないで済む。その棒が、つまり神様のご守護を受けることだ。あの御方を呼べ、あの御方の名を唱えろ、そうすれば自由になれる。そうしないと、時々という名の死の王うすの臼うすで碎かれてしまうぞ」(訳註——ベンガル地方の石臼いしうすは中心に芯棒を通す穴が空いて若干の隙間があるので、その隙間に入った豆や穀物は挽ひかれない)

タクールは再び歌をうたわれた。

この世の海に漕ぎだした私の小舟は

大実母よ 今にも沈みそうです！

迷妄の嵐は烈しく 無智の霧はたちこめ

大実母よ 心細さはつのるばかり……

心という名の舵取りは下手で

六人の漕ぎ手は皆、クズばかり

死にもの狂いに気はあせっても

ただアプアプと もがくばかり

愛情の舵柄は見るかげもなく壊れ

自信の白帆はズタズタに裂け

私の舟はもう転覆してしまいそう

大実母よ どうしたらいいでしょう?!

なすすべもない今となつては

なりふりかまわずハダカになつて

聖なるドウルガーの御名の筏を

しっかりとつかんで波間を泳ごう

六人の漕ぎ手——六つの感情 色欲、怒り、  
貪欲、高慢、嫉妬、愛着

〔妻子に対する責務〕

その時、長い間同席していたビシユワスさんが席を立てて出ていった。彼は以前、かなりの金持ちだったのであるが、身持ちが悪くて殆どの財産を使い果たし、今では妻や娘たちの面倒も見っていないのである。バララームが彼のことを話すと、タクルはおっしゃった。

「そりゃ、運に見放された気の毒な人だ。家庭を持つている人には責務おんいめがある。つまり借金があるのだ。祀り神と、先祖と、聖者に対する責務おんいめと、それから、妻子に対する責務がある。貞節な妻なら、それを養わなくてはいけない。子供は成人するまで養わなければいけない。

坊さんだけが物や金を貯めてはいけないのだ。鳥と僧は蓄えずだ。だが、鳥もヒナを持つと餌を蓄える。ヒナのために口で食物を運んでやる」

バララーム「この頃は、ビシユワスは修行者たちと交際しようとしています」

聖ラーマクリシユナ「はははは、修行者サイドゥの水鉢カマングルは持ち主にくつついて四大聖地を巡って歩くが、いつまでも水が苦にがい。（訳註）マラヤの風が吹き付けると、どの樹もみんな白檀になるといふよ！ けれども、シムルとアスワッタとアムラの木は白檀に変わらないそうだ。人によっては、大麻たいまを吸いたいが為ために修行者サイドゥと付き合う、あははは。修行者サイドゥはよく大麻を吸うことがあるから、かれらのそばへ行つて坐まって待まちっていて、大麻ブラサイドのお下りサドを貰もらうんだ」（皆笑う）

(訳注) サードゥウが持ち歩いている水鉢(カマンダル)は、昔はヒョウタンなどをくり抜いて作っていたので、水を入れると皮から苦みが出るがあった。